
寵・仮面ライダー ディレイド プワソン・ダヴリル MOVIE大戦2010の外伝の外伝

鉄楓 緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍・仮面ライダー ディレイド プワソン・ダヴィル MOVI
E大戦2010の外伝の外伝

【Zコード】

N6685K

【作者名】

鉄櫻 紺色

【あらすじ】

死んでも直りそうにない不治の病「四月馬鹿」に侵された深刻な馬鹿が、受け容れられない現実を望む姿に覆す。

ただ一日だけ許された祝福の日に彼は、嘘をばら撒き許しを搔き集めて在るべき世界へ改変を繰り返す。ただ、取り戻したいが為に。いや、嘘です。超ウソ。

(前書き)

ま、間に合わなかつた……
エイプリルフールをテーマにした外伝の外伝です。まずは拙作「デ
イレイドマスカーカレイド 仮面ライダー デイケイド外伝 仮面
ライダー デイレイド（Z8037H）」を御覧頂かないと、一切
理解できないかもしません。

「……」までも続く、と言つよりも果ても見えない広大無辺の白の空間に、十人の人影が円形に集いまばらに立つていた。

奇妙な空間だった。白一色で天地の境目は見えないのに、足には地を踏みしめている感触がしつかりとあるのだ。

さらに時折、なぜか4、5段建ての巨大な本棚が、ぎつしり詰めた本を揺らしもせずに彼方から、車輪もなしで滑るよつにやって来てその脇をかすめ、彼方へと走り去つてゆく。

「では話を始めよう。」

やがて周囲の九人を見渡して透が厳かに告げた。

「つて待てコラ透。ぜんつぜん分かんねえよ。」

放埒な髪型に無精髭の男が顎の髭を撫でながら透を窘めた。その背後をまた本棚が通過していった。

「お前のこつたからなんとなく諦めてつけど、大概にしねえとついにやゲイバーに放り込むぞ？」

「あ、あの！」

翔一の下品な恫喝の途中で中学生ほどの子供がどこか必死な様子で声を挟んだ。

この子供の名は野上 良太郎。「仮面ライダー 電王」として時の運行を守り、自分の家族と世界の未来を救つた男である。実年齢は二十歳手前ほどのはずであるが、彼の属する世界の時空の異常に巻き込まれ、見かけの年齢を退行させられている。

「……」はなんなんですか！？ みなさんは一体何者なんですか！？ ぼ、ぼくをどうするつもりなんで

良太郎はいきなり穴に落ちた。

「……」

あとに残つた九人の、透を除く何人かの怪訝声が唱和した。

「話どいうのは他でもない。」

「待て待て待て！？ 今のは何だ！？」

全てを無視して進行しようとすると透の腕に一真がすがりついて押し止めた。

「いやもう、ここにいるのは全員お前の知り合いだろ？ てのはだいたい分かつてたけど、今の子供についてなんか一言ないのかよ！？」

？

「知らん。あの男には会つたこともない。」

「はああ！？」

「おいじやあなんでそこにいたんだよ！？」

一真と翔一の喫驚の声が重なるが、透にはどうも聞こえた様子がない。

「おい、お嬢ちゃんからもなんか言つてやつてくれよ！？」

「……。」

翔一に話を振られた瞳子はと言えば、先ほどからメガネの下の目を固く閉じ、こめかみに指先を突き立て明後日の方角を向いて無視を決め込んでいた。

「……知らない。私はもうなにも関わらないから。」

「おおいッ！？」

「聞け。」

喧々諤々となつていた一同に向け、透が真顔のまま口を開いた。

「オオカミが出たぞ。」

「は？」

やはり透を除く何人かが怪訝な声を重ねるが、それきり透は口を閉ざしてしまった。

「…………。」

彼らの側を、数架の本棚が走り去つていった。

「え？ なに？」

いたたまれない沈黙の中、あまり細かいことを気にしないはずの真司がそれでも半笑いで辺りに問いかけるが、この場にいる男たちの誰もが目配せを交わしつつも答えが出せなかつた。

「あのー。」「

やがて、根負けした様子でブレザーを纏つた唯一の高校生が片手を挙げた。

「僕……の、こと、ですか？……ほら、ウルフォルフュノ巧はいきなり穴に落ちた。

「おおーい！君！？おーーいつ！返事しろーーー！」

「だからなんなんだよさつきからこの状況は！？」

慌てて穴の縁に駆け寄つた一真が屈んで縁に取り付いて叫び、翔一がとうとう透の胸倉を掴み上げた。

「嘘だ。」「

「は？」

いい加減怒りに歪んだ顔で問い返した翔一も一顧だにせず透は変わらぬ調子で告げた。

「さつきのは嘘だ。オオカミなどいない。」「

「分かつてゐわんなこたあ！」

「だから結局なにがしたいんだよ透はーーー？」

「あのー。忙しいんで帰りたいんですけど。」「

途端に翔一と一真が激高し、タキシードを着こなした子供までもがぼやき出した。

「ここは「四月一日の世界」だ。」「

いつの間にか翔一の手から逃れた透が、ぱっと両腕を広げてそう宣言した。

「なに？」

「は？」

「え？」

各々の喫驚で問い返す一同に、透は相変わらずのペースで語り出す。

「四月一日と言えば、「ハイプリルフル」。嘘を吐いても良い日だそうだな。」「

「いや、だからって、いもしないオオカミのために巧くんの方を消すことないじゃない！？どこ行ったのよ巧くんはーーー？」「

「うとう耐えきれなくなつて瞳子がツツ「なんだ。

「ほう。もしかして宗面変えか？俺たちを嘘にして、世界の破壊者の本分を全うしようつてか。」

完全に田つきが据わり、殺氣を放出して戦闘態勢に移行した翔一が透を睨めつけてゆらりと足の位置を変えた。

「え？ そななんですか？ 透さん…？」

先ほどからずつと状況の奇異に田を白黒させていた紺の武道着の少年が、あたふたと問い合わせる。

「嘘つきは泥棒の始まりだ、つておばあちゃんが言つていた。」

その明日夢の前に、かばうように総司が立ちはだかる。

「そして人のものを盗む奴は、もつと大事なものを失う、ともおばあちゃんが言つてた。……まさか透。心をどつかに落としてきたのか？」

決然とした対抗の意志と友への気遣いを混在させた表情の総司が問う。

「ちよつと、透！？ やめてよ！？ なんでそんな突然……！ 今まで頑張ってきたことは、じゅあいつたいなんだつたの！？」

瞳子までもが、必死の形相で透の前に立ち塞がり、宥めるように透の上腕を抑えて絶叫した。

「あんたそんな、嘘をつくだなんて回りくどことなんてするような奴じやなかつたじやない！？ どうして！？ ねえ、どうしてなの！？」

「いや。そんなことではない。」

その場の全員の疑惑の眼差しも物ともせず、透は相変わらず淡々と言葉を続けた。

「ただ、多元宇宙の接触崩壊という事象が、もし嘘だつたら、と仮想してみたら、ここにいたのだ。」

その言葉に、対峙する姿勢でいた仮面ライダーたる男たちがみな一様にきょとんとした顔となつた。

「え……？」

瞳子も、涙が滲んだ顔を呆然とさせている。

「ディケイドのフォローバックアップモジュールたる俺には、使命を完遂し平和になつた後のルーチンが存在しない。そもそもそんなことを自覚することすら不可能だつたはずなのに、だ。お前と接続した影響なのだろうな。」

「あ、げく私のせいですか。」

透の言いくさに瞳子は苦笑して顔をしかめた。

「だがいざれにせよ、感傷的な言い方を用いるならば、多元宇宙の接触崩壊などという事象は嘘にせねばならない。」

きなり足下に開いた穴に落ちた。

二
六
七
九
五
九
九
九

弱志は鼻

「あーのーーー！？ 忙しいんですけどーーー！？」

背後の穴の底（二）

背後の穴の底（？）から響いてくる阿鼻叫喚に、眉をひくつかせながら堪える様子の瞳子の押し殺した声に、透はあつけらかんと答え

「問題ない。あれらはディレイドの内部情報領域に構築された、彼らを模した疑似人格情報だ。本人ではない。」

「はあ？」

慌てて背後を振り向くが、夢かと疑うくらい綺麗に人影も穴も消滅していた。

「ここにいる実在する存在は、俺と瞳子だけだ。」

「…………」さがむさがさを

「その返答を構成する的確な語彙が存在しない。」

「なんとなく、つてことか。」

「完遂するべき使命とその結末を、「現状と嘘」という図式に置き換えてみた。それだけだ。」

言つて、透は後ろを振り向いた。

「さて。そろそろ意識を現実世界のほうに復帰させるとしよう。」

「もう、こんな下らないことに巻き込まないでよね？」

「留意はするが、場合によつては不可能だ。」

いつものように言い合いながら、一人はその場から立ち去つていった。

『翔太郎。検索が完了したよ。』

『ほう。んで？ 結論は？』

『すまない。検索が完了したというのは、実は嘘なんだよ。』

『おおいツツ！？』

『だが翔太郎、怒つてはいけない。君は知らないから無理もないだろ？ が、世の中には「エイプリルフール」という特別な日が制定されているんだよ。なんと、いかなる嘘を吐いても許される日だ。覚えておきたまえ。』

『実害を避ける美学くらい覚えてからにしろー。それから「制定」はされいねえーーー！』

そんな二人の会話が、背後から聞こえたような気がした。

(後書き)

ウソ吐く透とカオス煮がやりたかっただけで、取り留めのない話になつてしましました。

ここでの台詞が本編に反映されない可能性もありますので、真に受けずに読み流していただきたいところ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6685k/>

寵・仮面ライダー ディレイド プワソン・ダヴリル MOVIE大戦2010

2010年10月10日22時50分発行